

外国語活動・外国語科

渡辺 千愛実

外国語活動・外国語科における学び続ける子供とは

外国語活動・外国語科における学び続ける子供とは、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、多様に表現を工夫し、コミュニケーションの楽しさを求め続ける子供である。

1. 目指す姿

外国語活動・外国語科において、子供が学び続けていくためには、感情や情報を交流することに心地よさや手応えを感じ、コミュニケーション活動を楽しみと思えることが大切である。そのためには、自分と相手が互いを意識しないただの情報伝達に終わることなく、その情報伝達の中で相手意識をもったコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせなくてはならない。「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる」とは、インプット場面（知りたい場面）において、初めて出会う表現や相手の背景にある文化に対して、意味や意図を類推して理解を深めながら、相手や事物への興味・関心を高めたり、相手に配慮しようとしたりすることである。また、アウトプット場面（伝えたい場面）において、目的や場面、状況等に応じて、内容と言語材料の両面から思考・判断・活用を繰り返すことである。相手意識のある楽しいコミュニケーションをするには、自分にも相手にも互いを思いやり、その気持ちを表現しようとする努力が必要である。外国語活動・外国語科では、双方の思いや、その思いが伝わる表現の工夫によって、楽しいコミュニケーションが成り立つということ子供自身が理解し、よりよい表現の工夫を追究する子供を目指す。

2. 子供の現状と課題（対話に着目して）

これまでの研究から、子供は、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じた表現について追究していく中で、自分にはない表現に出合って疑問を感じたり、憧れを抱いたりするときに、自ら友達に関わりを求めてきた。「この状況でその考え方や表現は適切なのか」などと疑問を感じる場合は、問いをつくる対話につながり、「その表現を使ってコミュニケーションしてみたい」などと憧れを抱く場合は、問いの解決へ向かう対話につながるが多かった。特に、問いの解決へ向かう対話では、やり取りの中で「相手に、自分のことを認める言葉を言ってもらえたら嬉しい」、「それなら“Nice!”が使えるだよ。やってみたい」など、生活経験や既習表現を基に、外国語活動・外国語科の見方・考え方を働かせながら表現の効果を考えコミュニケーションに生かそうとする対話が生まれた。そして、憧れの気持ちをさらに膨らませたり、実際にコミュニケーションすることへの意欲を高めたりする姿が見られた。このように、よりよいコミュニケーションを追究する対話によって、実際のコミュニケーションをより豊かにすることができる。そして、自身でその実感を得ることが、外国語活動・外国語科にとって重要な過程であり、学び続ける子供の姿につながっていくのである。

外国語活動・外国語科においては、実際のやり取りの中で表現の効果を実感して、それに対する自分の考えをもつことができるかどうか、その後の対話の質に大きく影響する。特に、低・中学年では、効果を実感できないままコミュニケーション活動をすることで、失敗体験となってしまうことがある。どの場面の、どんな状況におけるコミュニケーションなのかを焦点化して、確実に効果を実感できる場の設定が重要である。

3. 対話を通して学び続ける子供を育てるための具体的な手立てと予想される子供の姿

(1) コミュニケーションに魅力を感じられる場面設定と単元構成

自分のことを伝えたり、相手のことを知ったりすることに必要感のある場面設定や、終末に向けて自分の表現の高まりや手応えを感じることでできる単元構成をする。必要感のある場面設定のために、コミュニケーションする相手が身近であったり、魅力的であったりすること、そしてその相手とする活動が「楽しそう!」「やってみたい!」「頑張ればできそう!」と強い願いをもてるものを設定する。単元構成については、単元導入時に終末で目指す姿を明確に提示する。子供は終末の活動への見通しをもつことで、コミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、自ら言語材料と関わっていく。その際、音声によるインプットとの十分な関わりが、英語をコミュニケーションするための手段として身に付ける上での重要な過程となる。子供が安心して発話できる環境を整えることで、後のよりよいコミュニケーションを追究する対話へとつながっていく。

(2) 理想とするコミュニケーション像を共有する場の設定

各単元の目的や場面、状況に応じて、普段のコミュニケーションを想起しながら、理想とするコミュニケーションについての考えを交流し合う活動を取り入れる。自分がされて嬉しい、自分がしてあげたいと思える、互いが楽しいコミュニケーションにするには、どの言語材料を使って、どのような様子で伝えるかを考え、共有する場を設定する。そうすることで、子供は終末への見通しをもち、それを実現するために必要な言語材料を選択して自ら関わり、活用することができる。そして、その過程が、自分の表現に対するこだわりを生むことになり、他者を求めて対話に向かう土壌を整えることになる。

(3) 友達と関わり、それぞれの表現を比較する場の設定

言語材料と十分に関わり、自分の表現へのこだわりをもった子供は、他者へ関わりを求めていく。友達の表現に触れ、自分と比較することで、子供はその表現の違いはどこからくるものなのかという対話への意欲を高める。ゲームやチャンツ、言葉に意味を感じられる発音練習等の慣れ親しみ活動を経て、自分の本当に伝えたいことを伝え合うコミュニケーションの場を十分に確保し、様々な友達と自分の表現を比較する場を設けることで、その表現に付随する思いや、その表現のよさについて確かめたくくなるようにする。確かめたくなくなるきっかけとなった疑問ややってみたくくなるような憧れの気持ちを基に、全体でその表現を使う目的・場面・状況を共有することで、子供は、「なぜ〇〇なのか」「もっと△△するにはどうすればよいのか」という、自分にとってよりよい表現方法を追究する問いをつくり上げていく。

(4) 再び言語材料と関わり、試行錯誤するための追体験の場の設定

外国語活動・外国語科では、問いの解決へ向かう場面で、特に教科らしい対話が生まれると考える。子供は自分の表現を見直すため、再び言語材料と関わり始める。それまでは話し手の思い中心の表現だったものが、話し手、聞き手それぞれの立場で考える試行錯誤を繰り返すことによって、目的や場面、状況に応じた適切な表現へと迫っていくことができる。そのために、発達段階に応じて、教師がデモンストレーションを見せたり、ペアやグループなど、少人数の中で相手を変えながら何度も試したりする追体験の場を十分に確保する。その際、どの場面の、どんな状況かを子供が確実に理解していることが重要である。追体験後は、「やっぱり〇〇だ」「相手はどう思ったのかな」などと、全体でその表現のよさや感じ方を確かめることで、自分が使うべき表現を自己決定することができるようにする。この自己決定が、子供にとっての問いの解決である。このように、表現の効果について考えることで、子供の中に自分の考えを聞いてほしい、友達の考えを知りたいという気持ちが生まれ、よりよいコミュニケーションを追究する対話が生まれるだろう。このような追究する過程を楽しんだ子供は、表現の意味を深く捉えられるようになって、元々もっていたコミュニケーションに対する考えを再構築し、次に取り組みたい新たな課題を見いだしていく。